花に魅せられて

高　林　成　年

私は、昭和15年７月、浜松市尾張町で土建業を営む家の長男として生まれました。第二次世界大戦の影響が、市民生活にも及ぶようになり、全ての生活物資が乏しくなりつつありました。子供の三輪車も、市販品は無くなり、父が手作りしたようですが、木製品で、形はともかくできましたが、とても重くて子供が乗って遊べるような出来栄えではありませんでした。もう国内に金属の余裕が無かったのです。その頃から、各町内の大通りでは、道路を横断して、高所に太いロープが張られ、中央に吊るした大きな木箱を標的にして、バケツの水を手で投げかける、町内住民総出の消火訓練が毎日繰り返されていました。

その頃、母親に連れられた花好きの子供（６才）が、いつの間にか地域の評判となり、八百屋さんでは、いつも、残り花を沢山頂戴していたようです。当時下町では、八百屋さんが花売りを兼ねていることが多かったのですが、これが私と花との最初の出会いでした。母の両親は田舎で健在でしたが、中心になっていた母の弟が出征して、農作業の手伝いが必要なこともあって、父が出征したのをきっかけに、戦火を避けるためもあって、食糧の心配が無い、母の生家に親子三人で疎開する決心をし、最小限の必需品だけをリヤカーに積んで、４キロを超える道を歩いて運んだのです。戦況は日増しに悪化し、米所の田舎でも、多くの農家が、ご飯に麦を混ぜるのが当時の常識となりました。しかし、母の父は頑固な人で、貧乏人は病気になっても、医者にかかる金が無いから、せめて日頃から食事・健康には気を配れと、食料を制限することの無いように、絶えず気配りをしていたようです。

頑固だが、花作りも大好きで、色々な種類を育てていました。私が花に興味を持つようになったきっかけは、殆どがこの疎開にあったと思います。周辺は花や緑がいっぱいの稲作地帯で、春には、田植え準備前の田に、レンゲソウの花が満開でした。すぐ近くに軍用機の生産工場があったのですが、不思議と米軍機の爆撃は記憶にありません。終戦直後も、副業で神仏用の切花を生産する農家もあり、春・秋の彼岸や、地域の祭りには、神社の境内に園芸店も多数出て、多種・多様な花や木が販売されていました。農家はどこの家でも、神仏への献花用に、必ず草花や花木を、屋敷内や畑で育てていました。戦後の田舎では、中学生くらいになると、メジロを飼う事が流行しましたが、やがて、飼育には許可申請が必要になり、今はほとんど飼育されていないようです。高学年になると、ウグイスも飼育しましたが、ホーホケキョと鳴かせるには、毎日一定時間の暗黒を与える日長処理が必要で、同時に正しい鳴き声を聞かせる、よく鳴く親鳥の飼育も必要でした。幼年期の田舎での生活が、今や私の多くの原点だと思っています。

父が抑留されていたソ連から帰国できたのは、私が小学四年生の夏休み中の事でした。浜松駅に夜中に着きますと役所から連絡がありましたが、当時浜松駅から田舎の家近くまでの交通の便は無く、自転車にリヤカーを取り付けて、４キロ程の出迎えでした。喜びが最高でなかったのは、父の出征中に、弟が病死していたことです。医者も薬も欠乏していた時代の悲劇だったと、今でも悔やまれます。

高校時代になっても、花への憧れが続き、すぐ近くに住んでいた農家の勧めもあって、千葉大学園芸学部に進学しました。当時、花卉園芸学教室に在職していた横井先生の話にも触発されて、京都大学の修士課程に進み、修了後、京都府立植物園に奉職しました。温室係に配属され、先輩の冨士原さんの下で、指導を受けました。生産園芸と植物学がミックスされた分野で、既存の種・品種と新しい種・品種の導入・同定・保存と、忙しくも夢のある楽しい時間でした。海外の植物園との種苗交換事業は、植物の多様さを体験する絶好の機会でした。毎年1,500～2,000の見知らない種や品種を、交換事業で導入して育成し、開花したものから同定して資質を高めました。熱帯植物が担当でしたが、当時、‘春のムード展’の名で、温帯植物の促成にも取り組んでいたので、海外の植物園から多様な種や品種も導入して試作できました。植物交換リストからその植物園の規模・内容も推定できるので、情報収集にも活用できました。当時使用していた栽培温室は再開園時のもので、老朽化しており、当時の使用目的に合わせて、再建するチャンスにも恵まれました。